

道

michi

'26.4

No. 95

優しさと奥床しき

およそ現代の人間を観るとき、最も欠除しているものは、優しさと奥床しきであろう。

まずここでは本教を主として書いてみるが、例えば自分の信仰がどれほど進み、身魂がどのくらい磨けたかを知るには一つの標準があつて、これはさほど難しいことではない。なによりも人と争うことを好まなくなり、優しさが湧き奥床しきが現れる。こういう心と態度になるこそ磨けたとみてよく、この点最も信仰の価値を見出すのである。そのようなようになった人にして一般から好愛され、尊敬され無言の宣伝となるのである。

ところが、今日の世の中を見ると、右のような優しさと奥床しきがあまりに欠けている。どこを見ても人に対しアラ探し、憎悪、咎めだて等まことに醜いことが目につく、特に現代人の奥床しきなどなさすぎるといっていい。なにごともし己一点張りで露呈的で理屈がましく、人から嫌われることなどあまり気にかけないのは、自由主義が行き過ぎ我儘主義になったと見るほかはない。最も見苦しいのは、

他人のこととなると暴露的で、排斥主義で、人情の薄いことはなほだしい。このような人間が殖えるから社会は暗く、冷たく人生の悲観者がますます殖えるというわけで、近来自殺者の多いのもこんなところに原因があるのではなからうか。故に真の文化社会とは、英国の紳士道や米国の博愛主義のごときを奉ずる人々が殖え、社会道義がよく行われることによって気持ちのよい住みよい社会が生まれるのである。そうなった社会こそこの世の天国としたら、天国はまことに手近いところにあるのである。

また別の面からみると、今日観光事業が国策上最も緊要事と叫ばれているが、なるほど物的施設も大いに必要ではあるが、外客に好感を与えることは、より以上の必要事であろう。というのは外客に接する場合、優しき、奥床しきと清潔のこの三つが揃うことで、これこそ一文の金も要らない外客誘致の最も有力なものとなる。そうしてこういう人間を造るその根本条件は何といっても信仰であつて、本教はその方針のもとに邁進しつつあるのである。



叭々鳥図
 伝 牧谿
 中国・南宋時代（12～13世紀）
 一幅
 MOA美術館所蔵

わずかに葉の残る梢に叭々鳥が止まり、首を巡らして羽を休める姿を略筆で描き、静寂な感じを蔽しい水墨の濃淡のみで表すなど絶妙な筆致で描かれています。光沢のある墨色の特徴などから、作者は画僧牧谿に擬せられています。本図は添付の覚書によれば、もと織田信長が所持していた二幅の内の一幅で、本能寺の什物として伝来したといえます。左下隅に「牧谿」の白文方印、右下に「天山」の二重郭朱文方印が捺されています。天山は足利義満の号で、この図が室町幕府の御物であったことを物語っています。明主様は宋元画について「その中で傑出しているのは、何といたっても彼の牧谿と梁楷であろう。(中略)東洋画としての最高峰であり、神技とっていい位で、見る度に頭が下がるのである」と仰って高く評価されています。

《目次》

み教え	2
代表挨拶	4
感謝奉告 広島グループ	10
感謝奉告 山口グループ	11
感謝奉告 土佐みろく教会	12
【聖地・聖蹟シリーズ】みあとしのびて	14
春の芸術祭(箱根)	19
春季大祭(熱海)	20
春季大祭(京都)	21
九州合同月次祭	22
感謝奉告 浜松布教所	24
感謝奉告 浜松布教所	25
シリーズ明主様(38)	27
聖地NOW	30
連載『神と繋がる明主様の食事観』(4)	33

《令和8年 信仰課題》

魂磨き^{たまみが} 心清めて世を救ふ

尊き神業^{みわざ}に励しめよ皆^{みな}

【実践の誓い】

- 1 み教え拝読をさせていただきます。
- 2 参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。
- 3 明主様の救いを拡げていきます。

代表挨拶

立石 博

この度、「明主様と聖地に直結する会」第三代代表に選任された立石博です。機関誌『道』で、初めてご挨拶をさせていただきます機会を得ました。

この度の新体制発足に当たり、当執行部に課せられている大きな課題がございますので、ご挨拶に先立ち触れさせていただきます。

一昨年暮れ、世界救世教と主之光教団との間で続いていた裁判が決着しました。変貌した主之光教団と袂を分かち、明主様と聖地を求めて結集した私たち「明主様と聖地に直結する会」は、包括法人世界救世教と協定書を交わし、包括法人の庇護のもと、東方之光、いづのめ教団の協力を得て、正常な信仰活動を維持、継続し、今日まで歩んでまいりました。これも偏に、信徒の皆さまの篤き明主様信仰があったればこそと、深く感謝しております。

教団の係争問題が終結した今、当会は暫定的体制を整備し、将来を開いていくべき時を迎えています。そうした局面で迎える五月一七日、平安郷で開催する全国信徒集会。ここでは、「明主様と聖地に直結する会」のこれからの在りようについて、会員の皆さまから率直なご意見を求めてまいりたいと考えております。

いただいたご意見は、必ずや明主様にお喜びいただける発展の実現に生かしてまいります。現在の實力では、まことにおこがましい言いようですが、「包括法人世界救世教の発展に寄与できる会に成長することを目指してまいります」と、大きな願いを抱いております。

そして明主様から賜ったご神徳、ご守護に、ひたすらに感謝と喜びをもってお応えしてまいりたく決意しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、改めてご挨拶を申し上げます。

春たけなわ。テレビのニュースなどから流れる桜の開花の動向に一喜一憂する様は、まさに日本列島に住む私たちの季節の風物詩です。この「道」四月号が皆さまのお手元に届く頃には、桜前線は、東北、北海道まで北上していることでしょう。改めて日本は南北に長い島国だと実感しますね。

四月一日、箱根神仙郷にて「春の芸術祭」、熱海瑞雲郷では「春季大祭」が厳かに斎行されました。前日熱海に到着すると、季節外れの台風を思わせる暴風雨にびっくりしました。宿泊したホテルの部屋の窓から瑞雲郷を眺めると、救世会館、MOA美術館が見えました。昭和一九年、明主様がまだ樹木が生い茂る未開の山だった瑞雲郷を指さされ『今に、この向こうの山に、何千人も収容できる建物を造る』と周囲の信徒に語られた話を思い出しました。まだ戦争も終わらない時に、ご面会も数十名が集まる頃のことですから、信徒も夢物語を聞くようだったと言います。ホテルの裏手に東山荘があることに気付き、明主様の中ではもう既に絵が出来上がっていたのだと思うと、改めて「明主様は神様だ」と感動しました。翌朝には、すっかり雨も上がっていました。聖地に到着すると、昨晩の雨風に堪えた桜が、全国から集まる信者さんの目を、楽しませてくれるかのように健気に出迎えてくれました。

現世の 地獄に喘ぐ諸人を

暫しなりとも天国に導く

そのように明主様のみ心を、たくさんの来聖者も魂から感じ取られたことでしょう。救世会館に向かう途中、つつじ山を通過した時には、「次は私たちの出番」と、佇むつつじから強いエネルギーを感じました。

新年度がいよいよスタートしました。聖地へ向かう道中も卒業旅行でしょうか、若い人たちが鮮やかな服装で各駅のホームや車中を賑わす光景に出会いました。かたや真新しいリクルートファッションに身を包み、いささか緊張気味の若者の姿も見られました。新しい環境の中に飛び込み、未知の世界が始まるのですね。

かくいう私も、新たなステージでのご神業が始まりました。西村前代表の後を受けて、代表を務めることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。もとよりその器になく、能力見識ともに未熟な自分ではありますが、今年がちょうど専従を許され五〇年、個人的にも節目の年でもあり、人間的な思いもいろいろ湧いてきましたが、最終的には明主様からのご下命と受けとめて代表の重責をお受けする決心をさせていただきます。

私自身振り返りますと、人生における一大決心をしたのはなぜか二月です。昭和五〇年二月専従。昭和六〇年二月、当時の教団護持委員会に立ち上がりました。平成一三年二月、息子二人の度重なる腎臓の浄化で家族を郷里の熊本に落ち着かせ、単身赴任を始めました。平成一八年二月、長男に生体間腎

臓移植手術。そして平成三〇年二月、西村先生の勇氣ある行動に共感し、行動をとることを決断しました。不思議なことの一連の決心は、悩んだり、迷ったりはありません。肚が決まるのは一瞬でした。やはり、明主様のお導きとしか考えられません。二月は節分、立春、そして明主様が、現界でのご経綸を終えられ、救世主として神界にお還りになられた大切な月です。おこがましいですが、明主様が昭和三年二月四日商売の道から離れられ、ご神業一筋に歩まれたご事蹟を鑑みながら、ご尊影の前に座ると、明主様は笑われるのでもなく、怒られるのでもなく、『しっかりやりなさい』と、叱咤激励してくださいっているかのような静かなお顔です。

四月一日、世界救世教管長・杉原先生のご配慮により春季大祭の祭典前に救世神殿に昇殿参拝が許され、凜とした空気に包まれる霊域で、緊張感をもちながら大神様、明主様に新執行部就任の奉告参拝に臨まさせていただきました。

私は、昭和三九年父の浄化をご縁に、母子三人で明主様との出会いを許されました。小学二年生でした。父は戦後シベリア抑留を経て帰国。無理がたたり、肋膜炎を患い、肺癌のため闘病生活。母は、親戚の紹介で藁にもすがる思いで入信。当時の出張所に熱心に通い、参拝・浄霊・奉仕に取り組んだようです。しかし、その甲斐もなく父は、昭和三九年七月八日帰幽しました。当時周囲の信者さん方は、「立石さんの奥さんはあんなに熱心にやっていたけど、ご主人が亡くなったから信

仰やめるんじゃないかと」と、噂をしていたそうです。しかし母は恩師である斎藤先生の「あなたの失敗を他の人が繰り返さないよう、たくさんの人に教えてあげなさい」との言葉に大きく心を揺り動かされ、「先生の大きな背中についていこう」と専従の決意をしました。

何か大きな奇蹟やご守護をいただき、信仰の道を歩み始めたわけではなく、大きな挫折と浄化が連続する中で、ご神意を求め続けたのでした。そうした母の信仰のリズムが、幼い私にも刻み込まれたのだと、今はこれまでの見えない霊界からのお導きに感謝しかありません。

そんな私にとって明主様を知る手立ては、今思い返せば、『景仰』『明主様ご尊影』『ご讃歌』の三つでした。『景仰』は昭和四〇年に立教三〇周年を記念して発刊されました。何と母は「子供にも一人に一冊ずつ」と三冊買い揃えてくれたのでした。当時、一冊八百円は、大黒柱を失った立石家にとっては大金でした。子供心に「お小遣いくれればいいのに」と思ったものでした。しかし、今では私の大切な宝物です。入信前の母は、教育ママの走りのような人でした、小学一年の私に先生をつけて書道を習わせたり、オルガン教室にも通わせられました。入信後は、価値観が一八〇度転換したようです。「本はしっかり読みなさい」というのは口癖でしたが、以後、母の口から「勉強しなさい」という言葉は、一回も聞いたことはありません。

二年間の熊本県玉名町での開拓布教を終えて、熊本子飼布

教所での団体生活が始まりました。当時は住み込みの専従者がたくさんいました。夜にはみんなが参加する「景仰」拝読会がありました。いやな時もありましたが、そんな環境の中で「景仰」を繰り返し繰り返し拝読する中で、明主様の生きたお姿、生きたお言葉が心の中に染み込んでいったと思います。「ご讃歌」は朝拝、夕拝の折に奉唱したお歌を参拝後に先生が「今日のお歌は何だったか」と聞かれるのが常でした。私は発表したくて夢中で覚え、得意げに手を挙げて答えていました。そんな環境の中、知らず知らずのうちに、自分の中で明主様像が醸成されていったよう思います。

昭和五三年本部奉職。その後すぐに、助師資格検定会がありました。筆記試験にご讃歌の問題があり、「祈りの葉のお歌の中で、同じ単語が、一つのお歌に四つ出ているお歌を記しなさい」との設問でした。皆さん、スツとでてきますか？

いと高き 尊きものは人なりと

思ふ人こそ人たる人なれ

正直の 宝はこよなき宝なり

誠の宝ぞこの宝なる

「人」と「宝」ですね。まるでクイズのような問題だと思いました。試験の後、仲間と話していると、「いや全然出てこなかった、分からなかった」と。私はなぜかすぐに出てきま

した。やはり、覚えたものは忘れるけど、繰り返し繰り返し続けたことは身につくものだ、その時実感しました。

中学生にもなると、いわゆる反抗期を迎え、布教所での生活にも嫌気がさし、当時不良少年と言われた子供がやりそうなことは一通り経験して、横道にそれた時期もあります。母はそんな私の躰に匙を投げ、明主様にお委ねしたのだと思います。事ある毎に「博、明主様のお写真を見てごらん。怒っていらつしやるか、笑っていらつしやるか」と言われ、ご神前に上がり明主様のご尊影を恐る恐る見上げると、とても怖いお顔で私を睨んでいらつしやいました。私の記憶では、明主様に微笑んでいただいたのはごく僅かです。親子三人玉名での開拓布教時代、栄光新聞の配布は大きな布教手段でした。新聞といっても日付も古く、中には黄ばんだものもありました。しかし「これは光の弾丸だ」と言われ、一部10円で配布しました。授業が終わるとランドセルを降ろして、二つ上の姉と二人での配布に向かいます。近隣を配布し終えると、電車でひと駅先の町に行き配布をしました。「10円をいただくことが、こんなに大変なことか」と身をもって体験しました。持参した栄光新聞を全部配布し終わり、ズボンのポケットに入った10円玉をジャラジャラ鳴らしながら、夕暮れの家路を急いだ時の達成感は、今でも忘れられません。家に帰って明主様に奉告すると、にこにこ笑っていらつしやいました。それ以外今日まで、明主様は私を叱咤激励される如くいつも厳しいお顔をなさっています。たまに「お前はしょうがないな」と苦

笑いされることもあります。

まさに明主様のご尊影は、私にとつての信仰のバロメーターであり、私の心の写し鏡です。むしろ明主様に微笑んでいただきたくて、ここまで来ることができたのかもしれない。こんな私を、根気強くお使いくださっている明主様に、改めて感謝です。

現身の明主様を知らない世代が、専従者、信徒ともに圧倒的に多くなりました、時の流れなので仕方のないことです。しかし、明主様のご神格は、その人の身魂相応に受け取ることが出来る。と以前より伺っていました。み教えに求め、さまざまな浄化の体験、布教体験を通して明主様の厳しさや愛情を体得していくことが基本だと思えます。しかし私たちと同じ人間として生活された明主様、また、神様としてご経綸をお進めになった明主様の、その生きたお姿を学ぶことができるのが「景仰」だと思えます。

御教えの実行者であられた明主様

昭和二七年ごろ、明主様はよく側近の奉仕者に対して、『原稿を書け。原稿を書くとお頭がよくなる。ことにおまえたちは、わたしのことを書けばいいのだ』とだれかれとなくおっしゃってられました。

それで私も、明主様のご日常について、一文を綴ったことがありますが、その時明主様から、『文章のうまい、へたは別として、おまえたち側近者は、出来るだけわたしの日常生活

を信者に知らせる義務がある。なぜなら、わたしがつねに信者に言ったり、教えたりしていることが、わたし自身に守れているかどうか、おまえたちの目でたしかめて、ありのままを書けばいいのだ』と、お言葉をいただいたことがあります。

(側近奉仕者)

『みんな光だ』

いつでしたか、何をしている時か忘れましたが、明主様は、『日常生活の小さい事柄でも、私に関することは、みんな光なんだから、なるべく多くの人に話してやりなさい』とおっしゃられたことがあります。

(側近奉仕者)

明主様の何と自信に溢れたお言葉でしょう。しかし実際には、超人的なご努力で分刻み秒刻みのご神業をされる、そういう裏打ちがあつてのお言葉であることを忘れてはならないと思えます。

「景仰」の後半には、当時の教会長、支部長、資格者、また親族や側近奉仕者などのやりとりが掲載されています。そこは対機説法の世界です。その人その人、状況に合わせた生きたお言葉です。一見正反対と思えることを、さまざまな場面でおっしゃっていらつしやいます。

ちよつと常識に欠けているような人には、『御神書を読んでいるか』とお諭しになる一方で、「はい、毎日繰返し拝読

しております」と返事をする人には、『おまえは雑誌を第一、御神書を第二に読みなさい』とおっしゃったりしています。またある奉仕者には『なんでも読め』とのお言葉通りに小説を読みすぎて、ご神書の拝読が疎かになっていると、『今後は絶対に小説を読んではいけない。焼いてしまえ』ときついお叱りをなさっています。何事も片寄ってはいけないというのを親身になって諭されているのですね。

そんな明主様の生きたお姿、生きたお言葉が繰り返し繰り返し「景仰」を拝読すると自分の心の中にたくさん染み込んできます。明主様のみ教えの引き出しが自分の中にできる感じですよ。何か困ったこと、悩み事に直面した時には、「こんな時、明主様だったら、どうなさるだろう。今の私に、明主様は何とおっしゃるだろう」。こんな問題意識をもち続けければ、明主様は必ずお応えになり、さまざまヒントをお与えになります。私自身もそのように取り組んでいきます。文字通り明主様に直結した日常生活を送りたいものですね。

今年掲げさせていただいた信仰課題・実践の誓いは、大変シンプルです。シンプルであるがゆえに奥深く、「一人ひとりの創意工夫」が求められているように感じます。み教え『世界救世教教義』あの短いみ教えの中に、神様のご経綸・ご計画、今までの歴史の総括、人間の使命、明主様ご出現の意義、そして世界救世教の使命役割、そのすべてが盛り込まれています。

魂磨き^{たまみが} 心清めて世を救ふ

尊き神業^{みわざ}に励しめよ皆^{みな}

- 1 み教え拝読をさせていただきます。
- 2 参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。
- 3 明主様の救いを拡げていきます。

参拝・浄霊・奉仕・み教え拝読は時に信仰の基本行ともいわれます。この行を通して私たちは清まります。清まることで満足する信仰にとどまらず、人救いにお使いいただき、明主様にお喜びいただける信徒にと、明主様がみんなにお声をかけていらっしやいます。この信仰課題を「景仰」を通して一つひとつともに学んでいきたく思います。どうぞよろしくお願いいたします。



水晶殿に生けられたつつじ

再入信に導かれて

広島グループ AT

私が、世界救世教を知ったのは、二八歳の時でした。健康状態がすぐれず、心臓発作も度々起こしては入退院を繰り返す中、近所に住んでいた方から声をかけられたことがきっかけでした。

まず布教所という所に案内されて、世界救世教について分かりやすく、いろいろと細かい部分までお話がありました。神様はあるということ、祈りと浄霊等々。そうして浄霊体験を積み重ねていくうちに、心身ともに軽くなっていて、しだいに心が弾むようでした。

また、布教所内の空気も感じ良くて、責任者や指導者の方を中心に明るく笑い声も聞こえ、ふと目をやれば、ここかしこにお花が生けてあります。すっきりと美しく、優しく心が和むようでした。私が今まで思っていた宗教やお参り所とはどこか違うものを感じ、日に日に引き込まれて「よし、決めたい。私も信仰仲間に入ろう」と思い、入信を決心しました。

そして入信式を迎え、信仰生活が始まりました。今までの普通の生活とともに、何気に楽しく、何気に忙しく、それでも時には悩み苦しんだり、悲しくなったり、長い間には悲喜

こもごもありながら、その都度浄化を乗り越えさせていただきました。

気が付けば、数十年の年月が経っていました。

最近の教団の状況が変化する中で、いつものように布教所参拝した時のこと、私たち信者に先生からお話がありました。「今度からM教として、いづのめ教区の信者さんと一緒になって、同じ一つの場所で信仰生活が始まります」と。私は驚いて思わず「エッ」と声を出してしまいました。

やがて間もなくM教の教会への同時参拝の日も決まり、考える時間もないままとうとう教会に通うことになったのです。

「こうなれば頭を切り替えるしかない」と言い聞かせながら、何とか頑張って参拝していました。今までの信仰とは余りにかけ離れた変貌に突然私の中で嵐と津波が起きてしまったのです。「脱会」という津波。最終的には教会長への報告でした。大変申し訳なかつたのですが、とても残念がられて、仕方なく受け入れてくださいました。とても私たち親子には心をかけていただきました。最後に先生は「Aさん、これで最後じゃないからね」と力強く言われました。心の中で私は「まあさすがにそれはないわ」と思っていました。

何かしら気軽な気分です。それからを過ごしていました。気軽になつた頃、同居の娘から突然、「立石先生の所の聖地直結の会に連絡を取ってほしい」と急せぎ立てるように話があり、戸惑い困つたのですが、その勢いに私は負けてしまい、「そ

これまで懇願するということは余程のことなんだろう”と、私も心を切り替えて、何とか聖地直結の会の信者さん数名に連絡を取れるようにしました。以前お世話になった皆さんの声を聴き懐かしくもあつたのですが、私自身は全く参加のことは考えておらず、とにかく無事に連絡させてもらうことで役割は済んだくらいのものでした。そして娘は去年一二月の広島グループの感謝祭に参拝が許され、どこか私までが安心していました。当日娘が帰って言うには「来月の感謝祭で入信することになった」と聞いて「ああそうなんだ」と、いろいろな思いで聞き留めていました。一月一〇日、無事に入信式を終えて帰った娘は何やら重たそうな紙袋を抱えています。見ると立石先生からみ教えや景仰、祈りの葉など、たくさんの書物でした。私は内心「ドキッ」としたのです、それは脱会した時にすべてを処分していたからです。処分したことでも大きな罪だと覚悟していました。大神様、明主様に大変な失礼をしたことで、必ずいつか厳しいお氣付けをいただくことだろうと、内心不安を抱えながら、でも「それは仕方ない」と自分に言い聞かせていました。やがてその思いも忘れかけていたこのタイミングで再びみ教えを手にさせてもらえるとは夢にも思っていなかったので感無量でした。なんともったいないことか、ありがたさと同時に申し訳なさで心が切なくなり複雑でした。また神様の優しさも恐さも覚えませんでした。その日の晩、娘から久し振りに浄霊をいただきました。少し照れている自分がいました。

私自身の再入信は全く頭になかったのですが、感謝祭に参拝したくなり、思い切つて立石先生に電話をしました、清水の舞台から飛び降りる気持ちで「エイッ」と声をかけながらドキドキ状態でした、お話をさせてもらっているうちに私も落ち着きを取り戻すことができ、「電話して良かった」とホッとしました。お蔭さまで二月の感謝祭に参拝を許され、先生や以前の信仰仲間と顔合わせもでき、喜びの一日でした。結果、私も三月七日感謝祭にて再入信のお許しをいただき、思いもしなかった段取りに驚いています。年を重ねての今回の入信ですが、せめて魂だけは何とか若く努めようと思つています。ここまでの道のりをつけてくださった大神様、明主様に深く御礼申し上げます。今さまざまな問題も抱えています、挫折せずに、明るく前向きに受けとめていきます。再び信仰という杖を頼りに歩んでまいります。ありがとうございました。

感謝奉告

自己浄霊と信仰の学び

山ロググループ M Y

昨年春先に感謝のご奉告をさせていただいてから、約一年が経ちました。先日、担当の先生が訪問くださった際に、「この月の祭典で私事ではありますがご奉告させていただきます

ます」と申し上げたことを感謝奉告させていただきます。

約二年前に、大動脈弁狭窄症と診断され、弁が硬くなり面積が狭くなって、送り出す血液の流れが速くなり「心臓に負担がかかる症状」と医師から伺いました。普通の人よりも心臓が大きいらしく、私はまじめに人よりも大きいことは良いことだと思っておりましたが、医師からは「大きいにも限度があるんですよ」と言われびっくりしてしまいました(笑)。

BNPという心臓への負担を判断する数値は、標準が一八・四のところ、令和六年五月の時点で、二二六・六あり、標準の一二倍超の数値でした。「経過観察」ということで、三ヶ月ごとに検診を受け、治療やお薬の処方はありませんでした。そして約二年が経ち、先日の検診前までは、三桁を超える数値が続いておりました。今年に入り検査を受けましたところ、まだまだ標準と比べると高い数値ではありますが、三桁を切り二桁台の数値の診断を受け、三ヶ月ごとから半年ごとの診断へととなりました。

特別な治療もお薬も処方されていたわけでもなく、私には「毎日の自己浄霊以外考えられない」という結論に達し、この度ご奉告をさせていただくこととなりました。

この祭典に、ご参拝された信徒さんの中に、日々自己浄霊をされている方がいて、祭典後のその方のお話を通して、一層「この度のことは日々の自己浄霊の賜物なんだ」と思わせていただきました。

そして、このご浄霊の手は、誰かのために何かのために翳

させていただくこと、もちろん、いただくことも大切にさせていただき、なおかつさせていただくことが、とても、明主様にお喜びいただけることなんだ」と、祭典後の座談会で皆さんとご一緒に学ばせていただきました。

昨年までは、祭典はご参拝が主でしたが、今年に入り、祭典以降の集会の日にも参加させていただくこともお許しいただいております。その座談会を通して、祭典での気付きや学びに加えて、また違う角度からの、気付き、そして学びをさせていただいております。

今年はどうな年にお導きいただけなのか、きっと「午うまくいく」と思わせていただきながら、明主様と、妻や家族、グループの皆さんと、つながるすべての方たちと過あごさせていたきたいと思えます。ありがとうございます。

感謝奉告

ご奉告し導かれる温かな日々

土佐みろく教会

N M

明主様いつもありがとうございます。

明主様を想わせていただき、明主様にお伺いし、明主様にご奉告させていただき、そんな毎日を送らせていただいています。

日に月に子供たちも巣立ち、「寂しくなっていくのかなあ」と思いきや、こんな毎日を通り過ぎていたでいてお蔭で、不思議なことには心配や不安、寂しさを感じることはなく、反対にワクワクし、ウキウキする毎日をお導きいただいています。私は現在、青果のお仕事をさせていただいています。ですから、果物や野菜の入ったケースを移動させることもよくあります。果物や野菜がいくつも入ったケースを動かすことはなかなかの重労働です。年齢的なこと、また女性の私にはなおさらです。

そんな時、私はいつも「明主様」と無言で申し上げ、果物や野菜の入ったケースに、サラッと一瞬ではありますが、ご浄霊をさせていただき持ち上げます。すると、信じられないことですが、何も申し上げず、何もしないで持ち上げる時とは全く違い、軽くスーツと持ち上げ移動させることができます。これには私自身いつも驚かされます。でも、急に上司に頼まれた時はその余裕が作れず、あたふたするんですが(笑)。

このようなことを、先日、出向してくださった先生と参加された信徒さんたちと話し合いました。「Nさんのお話をお聞きしていて、「祈り」というと「お願い」というイメージがあります、Nさんは、いつも明主様を想われていますね。ご奉告は、お願いというよりも、嬉しいこと、心配なこと、不安なこと、すべて、ご奉告することによって、喜びが拡がり、不安や心配は本当の意味で浄化されているんですね。

そして不安や心配がなくなり、ワクワク、ウキウキする道を歩まれているように感じさせていただき、私自身学ばせていただきました。ありがとうございます。これが本来のお祈りなんですかね」とお話しされ、「そうなのかあ」と思いました。

続けて、「一瞬でもご浄霊をいただいた果物さんや野菜さんたちが、光をいただいで嬉しくて、「この人のために」って力になってくれるんですかね。すごいことですよ。お光に包まれた果物や野菜がたくさんの人たちに届いて、それを食される方が間接的かもしれませんがお光をいただかれていますから、これ、すごい布教ですよね」と話され、みんなで大笑いしましたが、まんざらでもないような気がしました。

明主様のみ心を訪ね求め、ご奉告させていただいた日々。また、お喜びいただくための日々が、初めに申し上げたような、寂しさや不安よりも、ワクワク、ウキウキの日々へと、温かな想いに包まれ、また温かな想いで包まさせていただく日々を、過ごさせていただいているように感じさせていただいています。

明主様ありがとうございます。

神山荘



神山荘は、昭和十九年五月、明主様が東京・玉川より箱根・強羅に移り住まわれた最初の住居であり、神仙郷建設の出発点となった場所です。箱根連山の最高峰である神山にちなんで命名され、家相も理想的であるとしてたいへんお気に入りとなり、夏のお住まいとして用いられました。館内では、上の間を信者との面会の場とし、浄霊の間では悩み苦しむ人々に親しく浄霊を施され、洋間では来客の応接にあたられました。

また、巨岩を生かした建築や船形の洋館の造りに特徴があり、大正初期の別荘建築の趣を今に伝える貴重な建物として、平成一三年に国の登録有形文化財に指定されました。

総建坪、約四九二平方メートル（一五〇坪）。



上の間でご講話される明主様(昭和27年 映画「天国の苑」より)



洋間(手前：食堂、奥：応接間)



浄霊の間



神山荘の全景



神山荘室内から見た巨岩を生かした基礎

山月庵

山月庵は、明主様のご指示のもと、茶室作りの名匠・三代目木村清兵衛によって三年がかりで完成した名茶室で、現代の名室の一つとして知られています。茶の湯の侘び寂びの世界と、日本独自の建築美を国際的に普及するとの願いのもと建設されました。建坪は八二平方メートル（約二五坪）、茅葺の方形屋根を備え、書院式の広間八畳と草庵風の小間三畳中板から成ります。小間の天井は赤松の小丸太による格天井で、黒柿や桐、萩などがあしらわれるなど、各部に厳選された材料が用いられています。また、露地には細やかな心配りがなされ、茶室に入る人の心を自然と落ち着かせる閑寂な趣を備えています。

令和六年、国の登録有形文化財に指定されました。



小間で一服を楽しまれる明主様(昭和28年 映画「東方之光」より)



広間



小間の全景



露地とつくばい



小間の躰(にじ)リロ

◎木材関係の職種に従事されていた、当会信徒のNさんより、今回紹介した建物について寄せられたコメントを掲載いたします。

〈神山荘について〉

間取りや諸設備は数寄屋造りにて建築されており、選び抜かれた一品ばかりであることを目の当たりにしました。柱は北山杉の面皮柱で統一され、その四面の面皮の幅も一定で見事な仕上がりです。面皮柱に用いる丸太は末落ちのない真つ直ぐな材が必要で、意にかなうものはなかなか得難いものですが、神山荘ではそうした苦勞を感じさせることなく用いられています。大工の技術と目利きの確かさによるものと感じました。

また、壁は聚楽壁で、ちりの中も均一に整えられ、確かな技がうかがえます。床柱も北山杉の絞り丸太と思われ、絞り紋が均整で天然絞りで見まがうほど堂々とした風格を備えていました。縁側の天井の垂木、敷居や鴨居、障子に至るまで、細部にわたり丁寧な仕事が施され、「よくもこれほどのものが」と思う品々が随所に見られ、時の経つのも忘れて見入ってしまうました。

〈山月庵について〉

私が云々するまでもなく日本一の茶室であることは言うまでもない処です。これほどの茶室が築かれたのは明主様のご神格によるものと感じました。何一つ欠けることなく、また無駄もない完成された姿であり、大工、左官、庭師、銘木店が一致協力して成し得たものであることは言うまでもありません。名工・木村清兵衛による仕事は一分の隙もなく、その

丁寧な技が随所に見られ、感服の極みでした。

例えば茶席の待合席ですが、ここに見事なちん潜りが設えられています。使用されている曲がりの木は百日紅さるすべりの曲げ物だと思えますが、これが天然木無垢材であります。この材は使用箇所が限られるため流通しにくい材です。なぜなら「あて木」と言って加工しにくく、狂いが生じやすいからです。そのため在庫としておく業者はそうあるものではありません。それを採し出すことこそ大工方設計者の仕事なのですが、それには互いに業者との信頼関係がないと探せない品物です。そして見事に収まる所に収まった。というそれほどの希少価値のある物です。このように、関わったすべての人々が「明主様

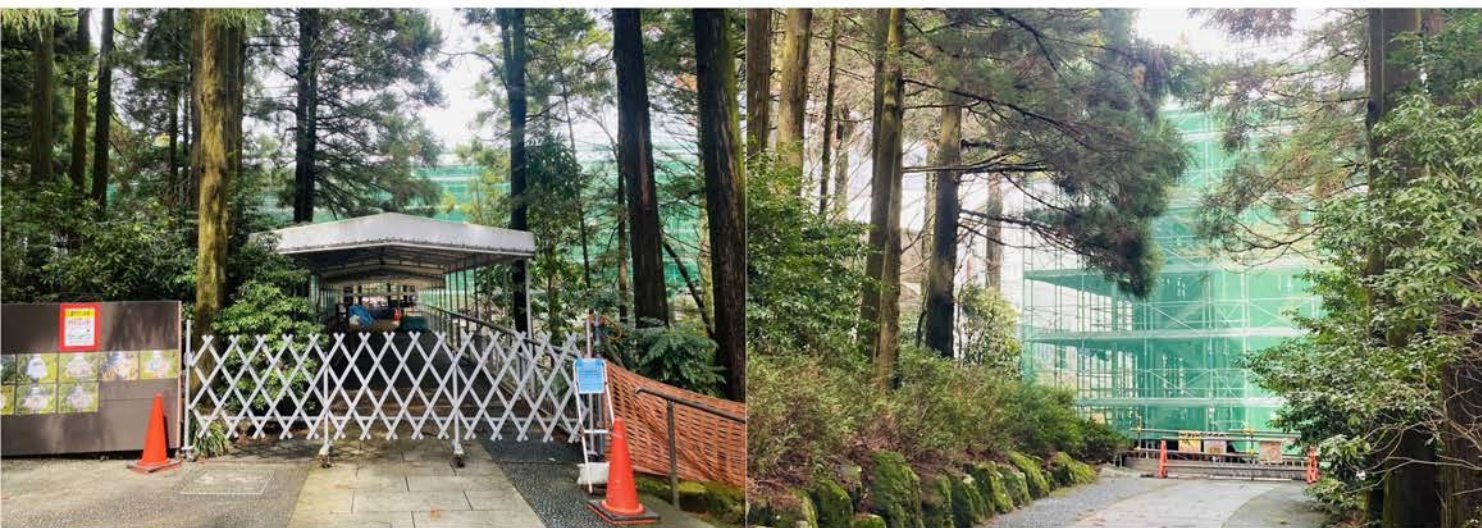


茶席の待合

のためならこれを”という一品を探し、それに応えようとする業者の誠意、職方の名を残さず技を残す心意気、すべての方々の熱い心持が集約されて成った貴重な茶室であることを感じずにはいられません。我々が奇蹟と思うことが日常的に起こっていたようです。僭越ですが、明主様のご神業、そのご霊格の高さを改めて感じずにはいられません。



み前に奉獻を捧げ、新たな歩みへ決意を捧げた



着々と進捗する光明会館の建設

(箱根)春の芸術祭

み心の実践から広がるまちづくり

4月1日、光明神殿にて春の芸術祭を斎行。中島MOA理事長は、「神仙郷の原型に復する建設」の一環として箱根美術館の改修工事開始を報告。続いて、明主様のみ心の拡大を日常生活で実践する具体例として信徒の活動を紹介。身近な人を大切にする営みが家庭から地域へ広がり、多くの人が集う場が生まれている姿は「ライフスタイルケア」の実践そのものであると述べた。さらに、「霊波と霊衣」のみ教えに基づき、利他の行いによって内外に光が増し幸福がもたらされ、その積み重ねが「心身ともに健康な人づくり、まちづくり」につながると強調した。



明主様のお姿に倣い、ご神業奉仕への邁進を誓う



山月ホールにて生花を觀賞する参拝者



教祖記念室を拝観する参拝者

奇蹟の生活者を目指して

(熱海) 春季大祭

4月1日、救世会館にて春季大祭が執り行われた。杉原いづのめ教団理事長は、み教え「信仰の醍醐味」をもとに信仰の本質に言及。理想の信仰者とは、すべてを神様のお計らいとして受けとめ、感謝と親しみをもって生きることであると述べた。さらに、み教えの体現者である明主様のお姿に倣い「奇蹟の生活者」を目指す重要性を示した。続いて平安郷美術館構想に触れ、この建設は、明主様のみ心を世界に発信する“生きたご神業の場、となり”三界万霊の救い、に繋がるとし、信徒一人ひとりが真心で参画する大切さを示した。



先達による祝詞奏上のもと、大弥勒様に祈りを捧げる



杉原理事長挨拶を傾聴する参拝者



花冷えの中、小雨と風に包まれながらの参拝

(京都) 春季大祭

聖地より広がるご神業

4月7日、満開の桜と花々に包まれる中、平安郷春秋庵にて春季大祭を斎行。杉原いづのめ教団理事長は、海外からの参拝者を迎え、ご神縁の広がりへの喜びを述べた。挨拶では、海外信徒の体験を通し、苦しい人間関係の中でも困難を浄化と受けとめ、感謝と祈りをもってみ教えを实践することで人生が転換していく姿を紹介。また、その実践が周囲へ広がり、新たな導きや海外布教の進展につながることを示し、平安郷建設とともにご神業が世界へ広がっているとの確信を述べた。最後に、聖地でいただいた光を身近な人々へ伝えることを呼びかけた。



各地から訪れた信徒の紹介。会場は拍手に包まれた

九州合同月次祭

足元を見つめ新たな一歩を

四月五日、晴天のもと、九州各地より七二名の信徒が田川布教所に参集。九州合同月次祭が執り行われた。

合同月次祭祝詞奏上、天津祝詞、善言讚詞奏上、お歌奉唱、ご浄霊、「おひかり」ご下付。二名から体験発表と厳かに進められ、「自分の足元をもう一度見直して今日からまた新たに進んで行きましょう！」と立石代表が力強く呼びかけられた。

祭典後の会場は、信徒の温かな交流の場となり、遠方から訪れた参加者は「田川の皆さんから心のこもった接待を受け、食事を囲みながら語り合うことができ、有意義な時間が過ごせました」「信者さんが採ってきて、作ってくださったタケノコのおにぎりがとても美味しかった」との声が聞かれた。また、田川布教所の信徒からは「ご神前にお供えしたミニ花を一人一つずつお持ち帰りいただき、さらに福引も行い大変喜んでいただけました。信徒同士の交わりの中で『また聖地でお会いしましょう』との声が交わされ、心温まるひとときとなりました」など、多くの報告が寄せられた。



信徒2名から感謝奉告



お話を取り次がれる立石代表



食事を囲みながら和やかな交流のひとつ



ミニ花贈呈式の様子



参拝後の福引に笑顔と拍手が広がった

入信から今日までの信仰生活

浜松布教所 EY

村松先生から、入信当時の話をするように伺いまして、お伝えします。私は子供の時、ブロック塀の上に手をかけたら上のブロックが頭に落ちて、出血したことがあります。小学生の時、左目の視力は一・二でしたが、右目は〇・一で、右目だけコンタクトレンズを付けていました。

中学三年になって、脳波を測ったところ「乱れがある」とのことでした。東京の病院で出された漢方薬を毎日、飲むようになりました。煎じたもので、実に臭くてまずいものでした。高校時代には神経症になりました、学校の成績は落ちていきました。

その当時、母が世界救世教に入信しました。父が以前に勤めていた職場の上司の奥さんから遊びに来るように言われ、行ったところ家庭集会で、松田先生が来られていたそうです。母は、その場で入信を決めました。私は、おば(母の妹)と同時に「おひかり」をいただきました。おばには「Y(私)」が『おひかり』いただくから、あんたもいただくの良い」、私には「おばさんがいただくから、あんたも」と母は話して、二人は「おひかり」をいただくことになったそうです。熱海の咲見町の日本家屋に行った記憶があります。私は「おひかり」

をいただいた頃は、首にかけることはなかったと思います。

私は、森田療法(遮断の環境で掃除・炊事・花の手入れなどの作業をする療法)を受けることになり、母が見つけてきた東京中野の診療所に、高校卒業の二月から入院しました。

「『おひかり』を身につけているように」と母に言われ、入院中、ズボンのポケットにずっと入れていました。入院期間はずっと五百日にわたり、退院する時には、「おひかり」の袋は真っ黒になっていました。私の神経症は良くなり、元気になりました。退院して実家に帰りまして、これから受験勉強を始めようという時、私は二回、意識を失いました。脳波の異常のためということで、薬を飲み始めたところ、まっすぐ歩けなくなり、薬をやめました。

その頃から頭が重く「体中の血の流れが良くない感じ」というか「何とも身の置きどころがない不快感」が出てきました。この不快感は、その後、三〇年ほど続きました。その頃から記憶力がなくなり、勉強しても覚えられなくなり、それは現在も続いています。

私は、母から浄霊を受けるようになりました。座布団に座って浄霊を受けると、自然と頭がだんだんと下がってきて、頭が床につきそうになりますので、不思議な感じがしました。

当時、両親は三島布教所に所属していました、布教所長は女性の先生でした。当時、お世話になっていた信者さんから、私には「男の先生が良い」と言われたそうです。両親は三島布教所のみでしたが、私一人だけ、布教所長が松田先生の沼津布教所に所属することになりました。このことが、現在

の浜松での生活へ繋がることになりました。私は毎日、弁当を持って自転車で沼津布教所に通いました。

浪人生活を三年重ねまして、当時の共通一次試験を受けたところ、私には驚くほどの高得点を取ることができ、大学に合格しました。奇蹟をいただいたと思っています。

松田先生は、浜松の牧野先生のお宅へ私を案内してくださいました。それから、牧野先生のお宅に伺うようになり、「酒を飲むと、いつも、ひどい蕁麻疹が出る」と先生に話したところ、「そんなことは何でもない。酒を飲む」ことを簡単におっしゃいました。それから、酒を飲んでも蕁麻疹は出なくなりました。また、先生は「脳波を測ってくるように」とおっしゃいました。脳波の検査を受けたところ「異常なし」とのこと、全治していました。

就職する時に、牧野先生から浜松の会社を教えてください、受けることにしました。集団面接で出たテーマがちょうどみ教えに書いてあるような内容で、み教えを自分の考えのように語りまして、そういうこともあってか、三浪という立場でしたが、入社できました。

入社後、自動車の運転中に、急に飛び出してきた小学生をはねてしまったことがあります。大事に至らずに済ませていただき、牧野先生から「自動車は凶器だから、いつも注意して運転をするように」と言われたことを思い出します。

その後、私には「立ち直れないのでは」というようなことがありましたが、吉岡先生、村松先生、妻に支えてもらったこと、浄霊をいただいたこと、長い入院生活で心の基礎を作っ

ていたいただいたことで、乗り越えることができたと思います。

昨年の四月、登山の時に頭を負傷した後、今でも「頭が重い感じ」「脳が煮えるような妙な不快感」がすることがあります。特に朝晩の体調が良くありませんが、できるだけ休まないで通勤することが、現在の私の目標だと思っています。

神様から守っていただき、先生方を含めて多くの方々にお世話になりました、現在があります。私には「牧野先生からいただいた課題」がありますが、まだ実現していません。そのことを含めて向上を目指してまいります。

感謝奉告

信仰の歩みとご守護への感謝

浜松布教所 K M

私の信仰は、母の入信がきっかけでした。母は胃が弱く、病院に通い薬も飲んでいましたが、ある時、知人に勧められて入信しました。その後、母の勧めで私たち子供三人も入信し、私は高校生の時に当時の松ヶ丘支部で横山茂先生から「おひかり」を拝受しました。父は入信しませんでした。が理解があり、反対はせず協力してくれていました。

母は入信してから病院通いもなくなり、薬も一切飲まずに健康になりました。九一歳まで長生きできました。

松ヶ丘支部で青年学生の集いなどがあり、小学生の錬成会

のお世話係を頼まれたり、小田原教会の錬成会などにも参加しました。

去年四月に警察官を名乗る詐欺に遭いました。出かけようとしていた時に、固定電話にいつもは留守電にしている出ないのですが、「これが最後のお知らせです」と入り、思わず受話器を取ってしまいました。「保険医療局の〇〇ですが……」と名乗り、私の住所や名前を知っていて、「石川県の病院で、あなたの保険証を使い睡眠薬が購入されています」と言われ、身に覚えもなく、びっくりしてしまいました。「わざわざ石川県まで行くこともないし、ましてや睡眠薬など関係ないし」と答えると、「おかしいですね。それでは被害届を出した方がいいですね」と言われました。「はい」と返事をすると、「金沢警察に電話するので、電話を切らずに待っていてください」と言われ、待っていると、「金沢警察の〇〇です」と別の人物が出て、「犯人グループの一人が捕まり確認したところ、あなたが人の良さそうな方だったから、あなた名義のキャッシュカードを五千円で買ったと言って持っていた。本当は金沢警察まで来てもらうのだけど、遠方なので、特別に電話で事情聴取します」と携帯電話へ誘導されました。「あなたは被害者ではなく、犯人の一味とされています」と不安をあおられ、「どうしてこうなったのか、今調べています。協力していただけますか?」と言われ、「はい」と返事をしました。いろいろ聞かれ、家族構成や、住まいなどの個人情報伝えてしまいました。

そして、「未解決の事案だから誰にも言っではいけませんよ」と念を押され、「守秘義務だから、もしバレたら私の首が飛び

ますから」と言い「毎日待時記録として、九時、一三時、一七時、二〇時と、一日四回連絡してください」と言われました。ラインで「特に変わったことはありません」と連絡し、「了解しました。お疲れ様です」と返信が来るやり取りを。二日間続けました。

三日目の朝九時に連絡すると、今まではすぐ返信があるのにその時はなく、「おかしいな。日曜日だからかな」と、警察は日曜日に関係ないだろうに思いました。「もしかして、私は騙されているのかな?」と不安になり、息子に「相談したいことがある」とラインで伝えると、すぐに来てくれました。今までのことを話したところ、息子は「それは詐欺だ!」と言いました。びっくりして、「あー、そうなんだ。やっぱりそうなのか」と思いました。

そして、警察に電話したところ、「それは今流行りの警察官を名乗る詐欺です。高齢者だけではなく、三〇代、四〇代の若い人も騙されています。気をつけてください」と言われました。娘たちも心配してすぐ家に来てくれました。

固定電話を休止し、携帯番号も変えました。セコムも導入しました。一人暮らしの高齢者を狙った事件が報じられる中、お金はなくても身の危険が心配で、とても不安でした。被害が何もなく良かったです。今までも事あるごとに日々神様に守られ、布教所の先生方や家族、周りの方々にも支えられ、毎日健康で過ごさせていただき、感謝です。

何事も前向きに楽しく、感謝して人生を歩んで行きたいと思っています。ありがとうございます。

神機到来 「新宗教弾圧」

中でも、もつとも徹底した弾圧を受けたのは大本であった。昭和一〇年（一九三五年）一月八日、三〇〇名の武装警官が綾部と亀岡の教団施設を襲い、証拠書類を押収するとともに出口王仁三郎をはじめ大本の幹部全員が拘引された。そして、

「邪教大本を地上から抹殺する。」

という内務省の方針にのっとり、本部の全施設はダイナマイトによって徹底的に破壊し尽くされ、組織もすべて解散させられた。大本の再興を恐れた当局は、こわした建物の礎石を日本海まで持って行って捨てたという。検挙された人々は、苛酷な拷問に苦しめられ、引き続き長い獄中生活を強いられた。出口王仁三郎や、夫人のすみ二代教主は、保釈出所まで六年八か月の長きに及んだのであった。取り調べられた信者は数千人、まさに近代宗教史上、類例を見ない大弾圧であった。

しかし、このような多難な時代にありながら、昭和元年（一九二六年）の神示以来、教祖の胸中にはぐくまれてきた救世

の思いは揺ぎないものがあつた。救いを求めてたずねてくる人々は日々、増加の一途をたどり、教祖の身近に生起するあらゆる事象が、「立つべき時は近い」という神の意志を告げていた。新たな宗教を創始するにはきわめて困難な時代であることを痛切に感じながら、悩み苦しむ人々を思えば、可能な限り人類を救いたい、なんとしても救いたいという、やむにやまれぬ思いがわいてくる。それは、わが身の危険や生活上の困難に対する心配がどれほど大きいものであれ、けつして押えることのできない、魂の奥底からわきあがる祈りにも似た願ひであつた。

「応神堂開設」

昭和九年（一九三四年）五月一日、教祖はそれまで住居にしていた大森の松風荘に妻・よ志と六人の子供を残し、麴町区平河町一丁目二番四（現在の千代田区平河町一丁目四番地）に家を借り、応神堂と名付けて救世の活動を始めた。応神堂は二〇坪（六六平方メートル）そこそこの五間の二階建ての日本家屋で、教祖は玄関に「岡田式神霊指圧療法・応神堂・本院」という看板を掲げ、二階を神業の場として使用した。近くに陸軍省（現在は国立劇場が建っている）をひかえ、四谷と皇居を結ぶ交通至便の地であつたが、近くに清水谷公園などもあつて、都心にありながら比較的落ち着きのある街並であつた。とくに麴町は皇居に接

し国会議事堂を擁する、文字通り日本国家の枢要の地であり、教祖が以前から進出を希望していたところであった。

教祖はこの応神堂で「岡田式神霊指圧療法」という名のもとに、信仰的指圧療法を開業した。神霊の研究を通じ、神界、幽界、現界の実相を極め、病氣と健康に関する発見などによって、神霊による癒しこそ病なき世界を実現させることのできる核心的方法であるとの確信を得たからである。

教祖はこの浄霊の救いについて、

「私という者は、世界の終末に際し、全人類を救い、病貧争絶無の地上天国を造るべく最高神の御経綸の下に、主脳者としての大任を負わされたのであるから、神は私に対して絶大な救いの力を与え給うたのである。其力と、いふのは病貧争絶無の中心である処の病の解決であつて、それに対する知識と力である。前者は私が今日迄解説して来た医学の誤謬や病理其他であり、後者は浄霊による治病の力である。」

と説いている。

応神堂の開業にあたって、教祖は開業ビラを作り、それを広く配って大々的に宣伝をした。

そこには教祖が神示以来、救世の情熱を胸に、営々と積み重ねてきた歩みと、浄霊の力のすばらしさが説かれている。

稟告

「余が創始の岡田式神霊指圧療法は今より八年前突如聖観世音菩薩の靈感を享け如何なる病者も治癒すべき大能力を与ふるに依り世の為匡救の業に従ふべしと爾来数年千余人に及ぶあらゆる患者に施術したる処其偉効は神の如く難病重症等全治せざるなく真に驚嘆すべき成果を挙げつつ今日に到れり。(中略)

茲に於て帝都の中心麹町区に施術所を設け大に救世済民の志を遂げんとす。」

* 申し上げること

** 誤りを正し、救うこと

稟告に記された文章の行間からは、昭和元年(一九二六年)より八年間にわたる研鑽を終わって、満を持していた好機が、まさに到来したことを確信し、救世救人の情熱をもって立ち上がった教祖の心がにじみ出ている。

浄霊を始めたころは一日数人くらいの病人が訪れていたが、そのうちに奇蹟によって人が人を呼び、また宣伝ビラの効果もあつたのか、しだいに訪問者がふえてきて手狭になつた。そこで三、四か月後には、すぐ近くの麹町分所に浄霊施術所を移したのである。

しかし、宣伝に使つたビラは間もなく当局の問題とするところとなつて、教祖は警察から呼び出しを受けている。

昭和九年(一九三四年)八月二十八日の『日記』には、

朝早く警察に行き広告の誇大の始末書をとられける

という歌がしたためられている。おそらく、投書か密告による呼び出しであろう。麴町警察署に出頭し、簡単な取り調べを受け、始末書を書いた程度で済んだものと思われる。

応神堂に移って以来、教祖の身のまわりの世話をしたのは、弟子の中島一斎の母・照代と妹・ひろみであり、教祖の秘書役を勤めていたのは井上茂登吉であった。教祖はときおり、妻子を呼び寄せ、また、みずから大森へ出かけることもあったが、毎日を忙しく浄霊に専念する生活を送っていたのである。

立教のそなえ 「千手観音像」

昭和九年（一九三四年）九月一日、教祖は千手観音の画像を描くようにとの神示を受けた。さっそく構想を練り、構図の下絵作りに取りかかった。そしてこの観音画像は、いづれ新教団の神体とすべきものであると考えて、幅五尺（一・五メートル）縦六尺（一・八メートル）という大作を描きあげることにしたのである。しかし当時住んでいた応神堂は手狭なので、とてもこのような大作を描く部屋はなかったが、たまたま教祖によって病を救われた金高真城という信者から、

「自分の家の三階に、観音様のお部屋として増築していた六畳間ができましたので、どうぞお使いください。」との申し出があった。教祖は大変喜び、さっそく一〇月二日から雲上蓮華台上の千手観音像の制作に取りかかった。

金高の三階画室に今日よりは観音の画を描く事となれり

金高の家は赤坂田町、日枝神社の真裏にあり、応神堂からもほど近い所にあつた。

これより三年ばかり前の昭和六年（一九三一年）ごろ、金高は一〇人ほどの従業員を雇い、「ルリ」という美容院を経営していたが、病弱で、まだ三〇代という若さであるのに、肌は荒れて土気色をし、大変やつれた顔をしていた。しかし、教祖の浄霊を受けるようになってから、すっかり若返り、見違えるような健康になった。

そのころのある夜、彼女は霊夢を見た。それは、自分が霊界へ行き、三途の川を渡ろうとした時、何ものかに襲われて窮地に陥ったが、光明燦然と輝く観世音菩薩が現われて、危機一髪のところを無事に救われたというものであった。金高は教祖に救われてから、この夢の中の観音こそは、ほかならぬ教祖であったことを覚り、非常に喜んで、一生懸命奉仕を続けていたのである。

次号に続く『東方之光』（上巻）より

NOW

神仙郷



神山荘前に咲く桜



開門 8:00
閉門 16:30

降臨の道の入口に咲く枝垂れ桜



瑞雲郷満開の桜花越しに熱海の街を望む



桜の蜜が好物のヒヨドリ



春が見頃の乙女椿

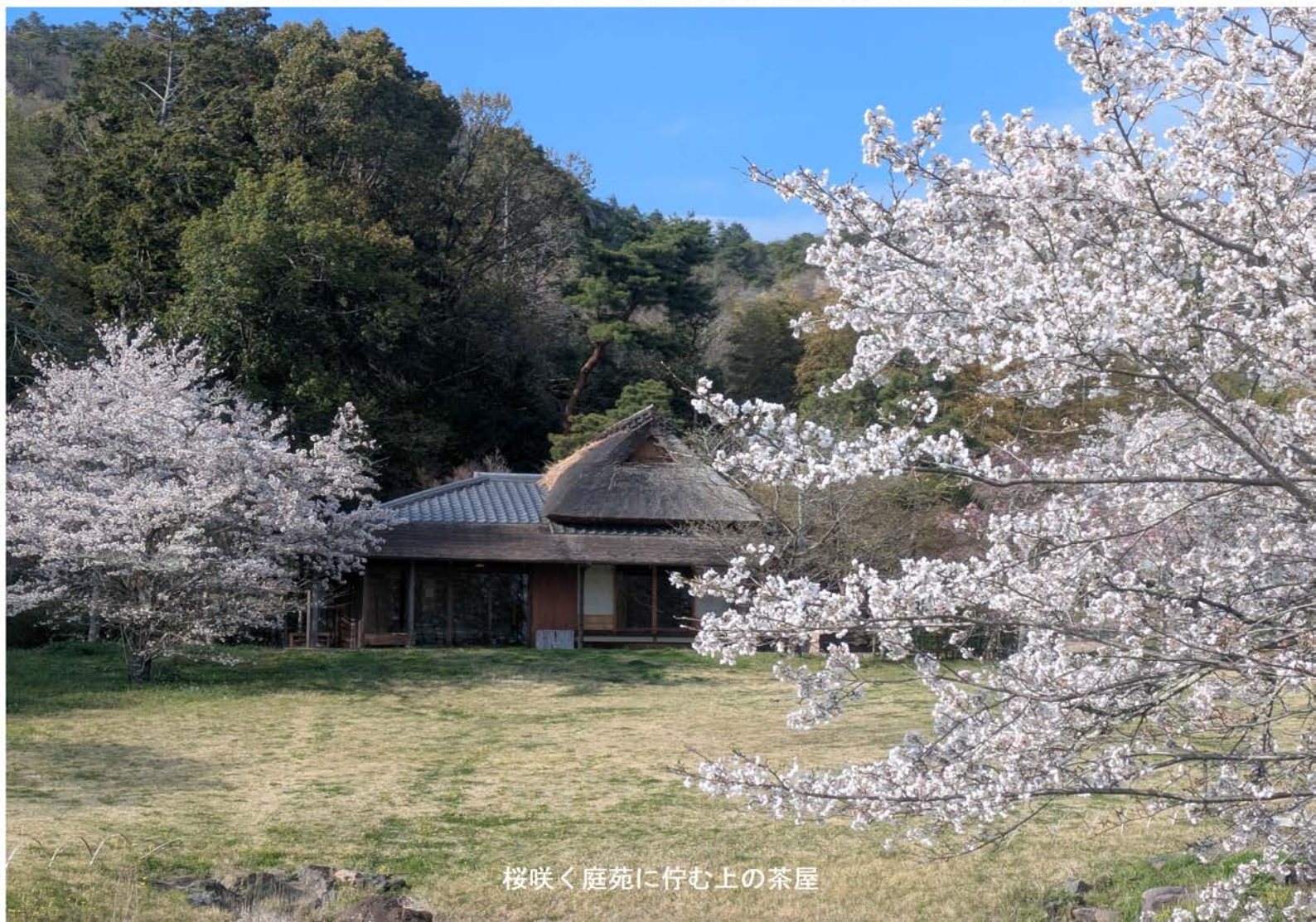


石雲台上から見上げる水晶殿

平安郷



満開を迎えた枝垂れ桜



桜咲く庭苑に佇む上の茶屋

神様とともに食す

（株）瑞雲 代表取締役 堀口照正

私たちは『神の代行者』として、神様が用意して下さった食べ物を神様の代わりにいただいている——という謙虚な姿勢で、一口一口を丁寧に、感謝して味わう。食事は、神様と繋がる大切な営みです。

今回は、日本の食文化に欠かせない「箸」に目を向けてみましょう。和食では、箸を料理の手前に横向きに置きまします。西洋や日本以外の東洋諸国では、箸やカトラリーを縦向きに置くのが一般的であるため、日本のこの置き方は世界でも珍しい、神様を中心とした生活を大切にした独自の作法なのです。これには大きく三つの理由があります。

一つ目は、「結界」を作るためです。日本古来の考え方は、箸は「聖と俗（神様の世界と人間の世界）」を分ける境界線、つまり結界の役割を担っています。箸の向こう側は命をいただく「神聖な食べ物」の世界であり、手前側は私たち「人間」の世界です。横向きに置くことで食べ物への敬意を払い、俗世と切り離すという意味が込められています。

二つ目は、「和」を象徴し、敵意がないことを示すため

です。西洋のナイフやフォークは先端を相手に向けて縦に並べますが、これは「武器」としての歴史に由来すると言われています。対して日本の箸を横に置く形は、「相手に刃を向けない（攻撃の意思がない）」という平和の象徴です。丸みを帯びた箸が横たわる姿は、その場の和を乱さない姿勢の表れなのです。

三つ目は、「命」をいただくことへの感謝です。箸を横に置くことは、自分と食材の間に一線を引くことでもあります。食事の前に「いただきます」と言って箸を取り上げる動作は、その結界を解き、「あなたの命を私の中に取り込ませていただきます」という感謝の儀式のような意味合いをもっています。

また、お正月や結婚式などの「ハレの日」には、両端が細い「両細箸^{りようほそばし}」や「祝箸^{いわいばし}」と呼ばれる箸が使われます。これは、神人共食^{しんじんきょうしよく}、すなわち神様と一緒に食事をするためです。片方は人間が使い、もう片方はその場に招いた神様が召し上がるためのものです。食事は神様から許されたものであり、神様とともに楽しむものであるという、和食の深い精神性がここに象徴されています。

このように、日本では古来、食事が神様と人間を結ぶ大切な役割を担ってきました。明主様が示された「食べ物とは、神様が人間を造ると同時に用意された、生きるために必要なものである。私たちが美味しいと感じ、その時に欲するものこそが、健康に生きるための食べ物で

ある」という食事観はまさに真理であり、この神聖な視点こそが日本文化の根幹であることが分かります。

日々の食事の際、「神から授かった聖なる命をいただく」と意識しながら箸を持ち、「いただきます」と感謝を込めましょう。一口ずつ丁寧に味わい、食感や美味しさを楽しみながら、「どもにおられるご先祖さまや神様は、私の体を通してどのように感じられていらっしゃるのか」と心を向けてみてください。そうすることで、今までとは違った喜びを感じられるはずです。

私自身、この実践を通して「食べたい」と思うものが少しずつ変わってきました。「自分を通してご先祖さまや神様が喜んでくださっている」と意識すると、自然と少量であっても体が喜ぶものを選ぶようになりました。素朴な旬の野菜の香りと味、お米一粒一粒の舌触りとうま味、口いっぱい広がるぬか漬の酸味と塩味、喉を通るお味噌汁の温かさ……。それらが体の芯から響きわたり、魂が喜んでいて感覚に気付きます。宇宙全体の大自然と一体になっている実感が芽生えたと、不思議なことに、景色や花を眺める際にも以前とは違う深い喜びを感じるようになりました。

食事は空腹を満たすだけでなく、俗世界に生きる私たちが神様と太く繋がるための大切な営みなのです。

皆さまもぜひ一緒に、神様とともに食事を楽しんでみてください。

神聖な食の世界

箸は、人間の俗界と神聖な命の食べ物の世界とを分ける結界です



人間の俗界



たけのこ

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 95 2026年4月15日発行

世界救世教

明主様と聖地に直結する会

